



Title	農業体験型修学旅行における農家対応と生徒行動の実態分析
Author(s)	倉岡, 恭子; 澤内, 大輔; 山本, 康貴 他
Citation	北海道大学農経論叢, 64, 105-111
Issue Date	2009-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39860
Type	departmental bulletin paper
File Information	RAE64_012.pdf



農業体験型修学旅行における農家対応と生徒行動の実態分析

倉岡 恭子・澤内 大輔・山本 康貴・棧敷 孝浩・渡久地朝央

An Analysis on Agricultural Experiences of a School Trip

Kyoko KURAOKA, Daisuke SAWAUCHI, Yasutaka YAMAMOTO,
Takahiro SAJIKI and Tomochika TOGUCHI

Summary

The purpose of this paper is to conduct a case study regarding agricultural experiences of a school trip in Japan. In order to obtain data, we conducted interviews with the owner of a farm-inn and teachers of the school. The results show the agricultural experiences in a school trip might be a catalyst to improve the students' understanding of agriculture.

1. はじめに

「総合的な学習の時間」の導入に伴う課題解決学習・体験学習の実施などを背景に、農家民宿などに滞在し農業体験を取り入れた修学旅行（以下、農業体験型修学旅行）も多くの中学校や高等学校（以下、高校）で実施されるようになってきた。農業体験型修学旅行は、修学旅行生の受け入れ側からみれば、地域の活性化などをもたらすものと期待される。一方、修学旅行生を送り出す学校側からみれば、農業体験型修学旅行は、教育の一環である。従来の研究では、農業体験の教育側面に着目したアンケート調査分析などは存在する（山田[10, 11] など）。しかし、農業体験型修学旅行における教育側面に着目して、その実態を解明した研究は、極めて少ないのが現状である。

本論文の課題は、農業体験型修学旅行における教育側面に着目し、その実態を解明することにある。具体的には、修学旅行生の受け入れ側（農家や受け入れ組織など）の実態を聞き取り調査によって解明する。さらには、実際の農業体験型修学旅行に参加・同行して、農家の対応と生徒の行動を観察した結果の報告を通じ、農業体験型修学旅行が具体的にどのように実施されているかなどの実態を解明する。

分析対象の事例は、修学旅行生受け入れに10年ほどの実績がある北海道のX地域のファームイン

で実施された九州のA高校の農業体験型修学旅行である。X地域で受け入れる修学旅行生は、高校生が最も多い。

本論文の構成は、次の通りである。2. では、北海道における農業体験型修学旅行受け入れ動向を概観する。3. では、分析対象事例における農業体験型修学旅行の実態を解明する。最後に4. は、結論である。

2. 北海道における農業体験型修学旅行受け入れの動向

図1は、北海道における修学旅行受け入れ数の推移を表している。平成18年までの過去6年間を通して、中学校では北海道を訪れる修学旅行生の人数・学校数ともに微増傾向にある。この背景としては、中学校の修学旅行における航空機利用への規制緩和などが実施された点などが挙げられる。一方、高校では平成15年をピークに、減少傾向にある。この背景として、高校では航空機利用が全面的に認められており、海外や沖縄県への修学旅行先としての競合が強まった点などが挙げられる。

北海道における農業体験型修学旅行の受け入れの主要地域は、長沼町、富良野市・美瑛町、滝川市、東川町の4地域である。これらの地域では1地域あたり1度に30名～300名程度を収容可能となっており、数戸の農家に分散して農業体験・農家

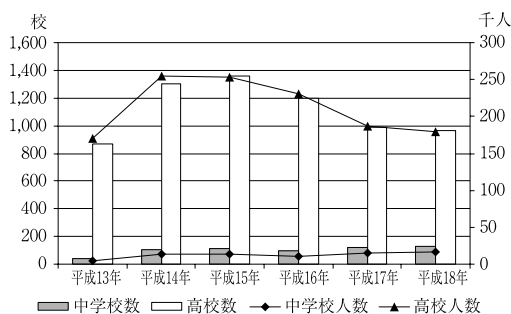


図1 北海道における修学旅行受入数の推移

資料：北海道庁提供資料より作成。

注）農業体験型修学旅行以外も含む一般の修学旅行実績を旅行大手5社で集計した結果。

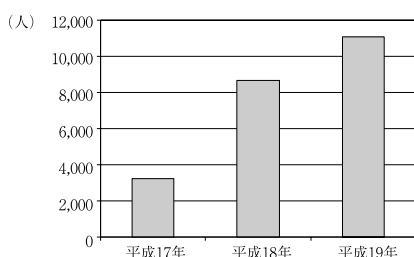


図2 北海道主要地域における農業体験型修学旅行生受け入れ人数の推移

資料：北海道庁および組織C提供資料より作成。

注）北海道主要地域である長沼町、富良野市・美瑛町、滝川市、東川町の合計人数。

宿泊を行うのが一般的である。1軒当たりの受け入れ人数は、3人～20人程度となっている。これら主要4地域について農業体験型修学旅行の受け入れ総人数は、増加傾向にある（図2）。本論文の分析対象であるX地域は、この4地域の1つであり、10年ほどの受け入れ実績を有している。

3. 農業体験型修学旅行の実態

1) A高校における修学旅行の概要

A高校は、九州の県立高校である。修学旅行先は選択制であり、環境学習もしくは英語学習、異文化理解をテーマとする3箇所の旅行先から自分の希望する旅行先を選択する。具体的には、北海道、沖縄県、シンガポールの3コースのうち、1箇所を修学旅行先として選択する。どのコースも班行動とすることで班の団結や、自主性、計画性を養うこととしている。

A高校の平成19年度修学旅行は9月に3泊4日

の旅で実施された。そのうち2泊がX地域でのファームイン宿泊であり、ファームイン滞在2日目の午前および午後に農業体験を行った。生徒の宿泊先は8軒のファームインおよびペンションであり、108名が男女別に分宿した。生徒のファームイン滞在中、教員はX地域のホテルに宿泊し、農業体験のみ視察する形をとっている。

A高校における修学旅行全体の目的（3コース共通）は、環境学習、文化遺産見学、国際交流、自然体験学習などを通じて人間としての視野を広くすることである。北海道コースの目的は、①環境に関する理解を深め、自ら考える態度を身につけること、②北海道の自然の雄大さに触れ、農場における勤労体験などを体験することにより、自然の大切さや自然との共存を考えること、③班別での行動を通して、互いに助け合うことの大切さを学ぶこと、などである。

A高校側として、X地域を農業体験型修学旅行先とする主な理由は、①ファームインとして100人規模の生徒を受け入れ可能な地域である点、②20人程度が一箇所の民宿に宿泊するため生徒との連絡体制の管理がしやすい点などである。

2) X地域における修学旅行生受け入れの実態

(1) X地域における修学旅行生受け入れ組織の概要

以下では、修学旅行生の受け入れ組織であるCが修学旅行生を受け入れるに至った経緯と修学旅行生受け入れにおける組織Cの役割などを明らかにしたい。

X地域では、修学旅行生受け入れを、10軒のファームイン

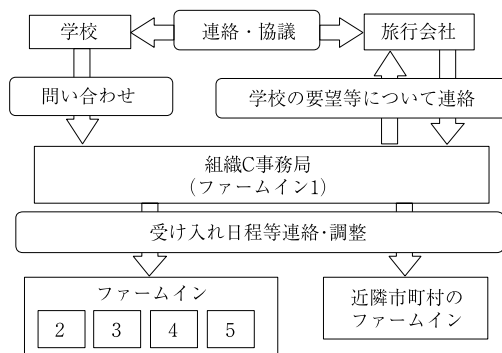


図3 地域における修学旅行生受け入れ組織の概要

資料：ファームイン実態調査（平成19年12月実施）より作成。

ームインおよびペンションから構成される組織Cが中心となって実施している（図3）。X地域では農家が経営するファームインのみではなく、自前の農地を持たない非農家が経営するペンションも修学旅行を受け入れている。組織Cの全10軒の宿泊施設のうち、8軒は農家が経営するファームインであるが、2軒は非農家が経営するペンションである。非農家では農業体験を家庭菜園で行うか、もしくは近所の農家に依頼して体験させている。

X地域では、組織Cが立ちあげられる前の平成6年8月に、初めて農業体験および農家宿泊をする高校生を受け入れた。その際には、ファームイン0とファームイン4の2軒のファームインで高校生を受け入れている。

平成7年12月には、ファームイン0のオーナーとファームイン4のオーナーによって組織Cの前身となる組織Bが設立された。組織Bは、ファームインで農業体験を行うことなどによって、X地域の他のペンションと差別化を図ることを目的として設立された。その後、平成8年から平成11年にかけて4軒のファームインの加入などを経て、組織Cへと至るのである。

平成11年には、役場から高校の修学旅行受け入れを依頼され、初めて組織として修学旅行を受け入れることとなった。さらに、平成13年には4校の高校を、平成14年には1中学・7高校を受け入れ、「総合的な学習の時間」の導入とも相俟って急速に受け入れ人数・学校数は増加していった。

修学旅行の受け入れ人数の増加に伴い、X地域のファームインだけでは宿泊施設収容能力の限界に達した。この問題を解消するために、平成13年より隣接する市町村に存在するファームイン、ペンションと協力して修学旅行を受け入れている。平成19年末時点で、組織CにはX地域のファームイン、ペンション10軒が所属しているほか、近隣市町村のファームイン5軒の協力を得て修学旅行生を受け入れている。

組織Cでは平成18年より、修学旅行受け入れについてはファームイン1の経営主およびファームイン5の経営主が事務局（窓口）を担当している。事務局の業務は組織外との窓口としての業務および、組織内の連絡・調整をする業務に大別できる。

組織外との窓口としての業務は、旅行会社や修学旅行を希望する学校からの問い合わせや資料請求への対応、旅行会社との連絡・調整などである。組織内の連絡・調整に関する業務は、受け入れが決まった修学旅行の概要を各ファームインに連絡することなどである。

さて次に、以下では、調査協力が得られたファームイン1で実施されたA高校の農業体験型修学旅行を事例として、農業体験型修学旅行の実態を見て行くことにしたい。

(2) 農業体験型修学旅行の実態分析

① 修学旅行生受け入れ農家の概要

ファームイン1は経営主が主としてファームイン経営を、経営主の息子が主として農業経営を行っている。経営主は、組織C事務局で修学旅行受け入れ事務も担当している。ファームイン経営のきっかけは、経営主がリタイア後、友人と共にスキーのための山小屋を求め、現在の自宅兼コテージを購入したことである。平成5年には本格営業のため、別棟コテージ2棟を、平成11年にはコテージおよび和室を増築した。また平成13年には農場横に農業体験施設兼宿舍を建設した。現在、宿泊設備は自宅と一体型のコテージ（定員6名）2戸、別棟コテージ（定員6名）2棟、別棟コテージ（定員10名）1棟、農業体験宿泊施設（定員12名）1棟、各キッチン・バス・トイレ付および、トイレ・シャンプードレッサー付和室（定員4名）

表1 ファームイン1における家畜飼養頭数

繁殖母牛	34頭
育成牛	28頭
（うち育成牛出荷頭数）	22頭

資料：ファームイン実態調査（平成19年12月実施）より作成。

表2 ファームイン1における経営耕地面積および作目

	経営耕地面積 (ha)		
	合計	所有	借入
牧草	20.0	10.0	10.0
カボチャ	1.0	0.5	0.5
馬鈴薯	1.0	1.0	0.0
小麦	3.0	1.0	2.0
スイートコーン	0.8	0.8	0.0
合計	25.8	13.3	12.5

資料：ファームイン実態調査（平成19年12月実施）より作成。

表3 ファームイン1における家族労働力

世帯構成	農業		ファームイン					
	基幹	農業体験	経営	接客	調理	清掃	洗濯	その他
ファームイン経営主	×	○	○	○ ¹	—	—	—	○ ²
息子（農業経営主）	○	○	—	—	—	—	—	—
息子の妻	△	—	—	○ ³	○	—	○	○ ⁴

資料：ファームイン実態調査（平成19年12月実施）より作成。

注1）表中で、○は「主要な労働力」、△は「補助的な労働力」、×は「過去に実績はあるが平成19年はなし」を表す。

注2）表中で、¹は主に修学旅行、²は食材の買い出し、朝食の配膳・準備などで補助的に予約対応、³は主に一般客（フロント）の接客、⁴は予約対応、パートへの指示など。

表4 ファームイン1における雇用労働力

	農業		ファームイン				期間	備	考
	補助作業	農業体験補助	調理補助	食事準備	清掃	その他			
パートa	—	—	○	○	○	—	通年	勤続10年。	
パートb	—	×	○	○	○	—	通年	勤続6年。	
パートc	—	—	○	○	○	○ ¹	通年	勤務日時は不定だが、英語・インターネット対応可。	
研修生d	○	—	—	—	—	—	通年	住み込み。平成19年8月より勤務。	
研修生e	○	—	—	—	—	—	通年	平成19年8月より休職中。	

資料：ファームイン実態調査（平成19年12月実施）より作成。

注1）表中で、○は「主要な労働力」、△は「補助的な労働力」、×は「過去に実績はあるが平成19年はなし」を表す。

注2）表中で、¹はフロント業務担当。

2室などとなっており、収容人数は最大50名である。その他施設として食堂、定員6名の浴場2室などがある。

ファームイン1の平成19年現在の農業経営概要は表1および表2の通りである。家畜飼養頭数は繁殖母牛が34頭、育成牛が28頭である。経営面積は約25.8haで、うち20haは牧草、残りはカボチャ・馬鈴薯・小麦・トウモロコシを作付けしている。

表3は農業およびファームインでの家族労働力、表4は雇用労働力を示している。農場での基幹労働力は経営主の息子である。農繁期には息子の妻が補助的労働を行う。平成18年までは経営主も補助的労働を行っていたが、平成19年はファームイン関係の業務多忙により、農作業は殆ど行っていない。ただし、修学旅行生の農業体験については息子と経営主の2名で対応する。その他の労働力として2名の研修生がいるが、うち1名は、平成19年8月より休職中であり、また、もう1名は、平成19年8月に採用し、農場で補助的な作業を行っている。

ファームインにおける基幹労働力は、経営主および息子の妻の2名である。また雇用労働力としてパート3名を通年で雇用している。経営主は修

学旅行の接客のほか、食材などの買い出し、朝食の準備・配膳など行う。また息子の妻は、調理、洗濯、予約対応、清掃の点検、パートへの指示などを行う。パート3名は主に調理補助、食事準備、清掃を行う。

② 農業体験型修学旅行実態の観察結果

以下では、ファームイン1の農業体験型修学旅行に同行し、ファームイン滞在中（2泊3日）の生徒側の動きおよびファームイン側の動きを観察した結果を示す。なお、ファームイン1には生徒19名が宿泊した。

まず初日には、生徒はファームインにて夕食をとり宿泊した（表5）。夕食前には、生徒は経営主から食材である羊肉についての話を聞いた。また、夕食後にも一部の生徒が、経営主と和牛の飼育などについての話を聞く姿が見られた。農家側は、経営主の息子の妻およびパートが中心となって、夕食の準備、片付けをするとともに、翌朝の朝食の下準備をしていた。

ファームイン滞在二日目には、生徒はファームインで朝食、昼食、夕食をとり、午前、午後には生徒は二班に分かれて牛舎体験（牛の世話など）

表5 ファームイン滞在中のA高校修学旅行生および農家の動き（一日目）

時刻	修学旅行生側の動き	農家側の動き
17:35	バスで到着 生徒（ファーム長）挨拶	息子の妻・パートa, b, c 夕食の準備完了
17:40	夕食BBQ・部屋について説明, 解散	
18:15	夕食のため集合	経営主が火起こし, 息子の妻・パートは配膳 経営主の話 （食べ物, 食糧事情, 健康, 羊肉, 食材について） 息子の妻・パートa, b, c は朝食の配置準備
18:30	BBQ開始, 経営主が焼き方の見本を見せる	
19:50	夕食終了, 入浴 一部生徒はゴミの分別・片付け手伝い	息子の妻は朝食の下準備
21:00	就寝	

資料：修学旅行実態調査（平成19年12月実施）より作成。

表6 ファームイン滞在中のA高校修学旅行生および農家の動き（二日目）

時刻	修学旅行生側の動き	農家側の動き
6:00		息子の妻・経営主は朝食準備開始
7:30	朝食のため食堂へ移動	
7:55	朝食開始 ※残り物ほとんどなし	経営主の話（ご飯を残さないこと, 食材について） 息子の妻は朝食片付け
9:00	農場へバスで出発	息子の妻は昼食準備, パート出勤
9:03	農場到着	経営主は息子を生徒に紹介
9:15	2班（10名+9名）に分かれ, 芋畑と牛舎へ移動 農業体験開始 〈牛舎班〉 経営主の話（食の安全, トレーサビリティについて）	牛舎班は午前・午後とも経営主が対応
9:50	ブラッシングの説明, 体験	
10:10	経営主の話（牛の食べ方, 生態について）	
10:15	誕生直後の子牛を見学	息子の話（初乳について）
10:55	休憩（ジュース）	
11:15	体験再開 倉庫前にて経営主の話（資料「みんなの食と農業」）	
12:00	午前の体験終了	パートa, b, c は外出（12:00-13:00）
12:10	コテージ到着	
12:30	昼食（豚丼）	
13:30	コテージ出発, 農場到着	息子の妻・パートa, b, c は昼食の片付け, 夕食準備
13:45	班行動, 農業体験開始 〈芋畑班〉 畝で2, 3名が芋ほりモデル体験	芋畑班は午前・午後とも息子が対応 息子の話（減農薬栽培, 平成19年の旱魃について）
14:00	トラクターで芋ほり実演, 簡単な選別	
15:00	休憩（スイカ）	
15:15	和牛の出産見学	息子の話（牛の出産について） コンテナをトラックへ積み込み（約1tを収穫）
16:00		
16:15	体験終了, 見回りに来た教員と写真撮影	
16:25	農場出発, チーズ工房へ	
16:30	チーズ工房到着, 見学	
16:50	チーズ工房出発, コテージ到着	
17:35	夕食（豚カツ）※残り物ほとんどなし	
18:15	夕食終了, 順次入浴	
20:30	就寝	息子の妻は夕食片付け終了

資料：修学旅行実態調査（平成19年12月実施）より作成。

および畑作体験（馬鈴薯の収穫など）などを行った（表6）。午前中に畑作体験をした班は、午後には牛舎体験を、午前中に牛舎体験をした班は午後に畑作体験を行った。

今回、実際に観察できたのは午前中に牛舎体験、午後に畑作体験を行う班であったが、その実態は、次の通りである。まず、午前中の牛舎体験では、経営主から食の安全、トレーサビリティについての話があった後、生徒はブラッシングや水やりなど牛の世話を体験した。1時間半程度の体験を終

えた後、生徒は休憩をとった。休憩後には、組織Cで作成している資料（「みんなの食と農業」）を用いて経営主から①農業と自然環境とのつながり、②環境保全型農業の概要、③日本の食料自給率、④日本の農業事情、⑤日本の食糧事情、⑥世界の食糧事情などについて40分程度の講義を受けた。午前の体験後にはファームインで昼食、休憩をとった。午後の畑作体験では、生徒は経営主の息子から減農薬栽培などについての話を聞いた後、芋ほり、芋の選別などの畑作体験を行った。生徒は

表7 ファームイン滞在中のA高校修学旅行生および農家の動き（三日目）

時刻	修学旅行生側の動き	農家側の動き
4:30		息子の妻・経営主は朝食準備
6:30	朝食※残り物ほとんどなし	
6:55	朝食終了	息子の妻は朝食片付け開始
7:00	コテージ前集合、生徒挨拶、写真撮影	
7:07	コテージ出発	
8:30		朝食片付け終了
9:00		パート出勤

資料：修学旅行実態調査（平成19年12月実施）より作成。

1時間30分程度の体験を終えた後、休憩をとり、収穫した馬鈴薯をコンテナに積み込む様子を見学し畑作体験を終えた。

その後、ファームイン1に宿泊していた生徒全員で近くのチーズ工房を見学した。生徒は夕食をファームインでとった後、二日目もファームインに宿泊した。農家側では、日中の農業体験を経営主と経営主の息子が担当し、経営主の息子の妻およびパートが朝食、昼食、夕食の準備、片付けを担当していた。

ファームイン滞在三日目には、生徒は朝食をファームインでとった後に、ファームインから出発し、次の修学旅行先へ向かった（表7）。農家側では、経営主の息子の妻および経営主が朝食の準備と片付けを担当していた。

以上、ファームイン1の農業体験型修学旅行に同行し、ファームイン滞在中の生徒側の動き及び農家側の動きを観察した結果から次の2点が指摘される。

第1に、農家は、農業体験や食事などの場面を通じて、様々な話題を提供し、食や農に対する生徒への関心を高めるよう努めていた点である。特に、この事例農家では「食べ物を大切にすること」が強調されており、生徒も食事を残さないように努める姿勢が見られた。

第2に、生徒は、農家での食事、農家との交流などのファームイン滞在を、楽しんでいる様子が伺えた点である。特に、この事例農家では「農業体験が重労働・長時間にならない点」が配慮されており、生徒も農業体験を苦にせずに、楽しんでいる姿勢が見られた。

4. おわりに

本論文では、農業体験型修学旅行における教育側面に着目し、その実態を解明した。分析対象の事例は、修学旅行生受け入れに10年ほどの実績が

ある北海道のX地域のファームインで実施された九州のA高校の農業体験型修学旅行であった。主な分析結果は、以下の通りである。

①農家は、農業体験や食事などの場面を通じて、様々な話題を提供し、食や農に対する生徒への関心を高めるよう努めていた。

②生徒は、農家での食事、農家との交流などのファームイン滞在を、楽しんでいる様子が伺えた。

以上の分析結果は、農業体験型修学旅行が、生徒の食や農への興味関心を高める1つのきっかけになり得る可能性を示唆するものとする（註1）。

註

（註1）農業体験型修学旅行が、どのような教育的効果を有するかなどの検証は、稿を改めて試みたい。

引用・参考文献

- 〔1〕井田雅恵・藤井わか子「若者の農業・農産物への意識調査—農業体験・学習への取り組みの重要性」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第49号, 2004, pp.51-62.
- 〔2〕丸山敦史・浅野志保・菊池眞夫「小学校における農業体験学習の効果—東京都練馬区を事例として—」『千葉大学園芸学部学術報告』第58号, 2004, pp.59-66.
- 〔3〕農林水産省『子ども農山漁村交流プロジェクト～120万人・自然の中での体験活動の推進』。(アクセス日: 2008年3月24日) [online] available in (http://www.maff.go.jp/j/press/nousin/nouson/pdf/070831_1a.pdf).
- 〔4〕野田和宏・宇佐見晃一「農業高校生の農業観と授業評価との関係」『日本農業教育学会誌』第32巻第2号, 2001, pp.61～73.
- 〔5〕野田知子・大竹美登利「生産体験が食意識・食行動に及ぼす影響—食べ物のいのちに対する中学生の認識とのかかわりで—」『日本家庭科教育学会誌』第46巻第2号, 2003, pp.114-125.

- [6] 七戸長生・陣内義人・永田恵十郎『農業の教育
力ー人と自然を生かす道』農山漁村文化協会, 1990.
- [7] 高田哲也・佐藤洋平・石川雅也「北海道におけ
るファームインの現状と評価ー鹿追町, 新得町を事
例としてー」『農村計画論文集第2集』, 2000,
pp.289-294.
- [8] 山崎光博『グリーン・ツーリズムの現状と課題』
筑波書房, 2004.
- [9] 矢野由起「高校生の食生活に対する指向性なら
びに価値観と食に関する知識及び食生活への参加状
況との関連」『日本家庭科教育学会誌』第42巻第4
号, 2000, pp.23-30.
- [10] 山田伊澄「子どもの農業体験の取組みに対する
農業者の協力意向ー農家アンケート調査結果の解析
ー」『農業経営研究』第39巻第1号, 2001, pp.111-
114.
- [11] 山田伊澄「農業体験学習の取り組み方と教育的
効果の関連性に関する分析」『農林業問題研究』第
162号, 2006, pp.101-108.
- [12] 吉田謙太郎・樋口めぐみ「ファームイン全国調
査によるグリーン・ツーリズムの計量分析」『農業
総合研究』第53巻第3号, 1999, pp.45-97.

[付記] 本論文の内容は, 主として平成19年8月~12
月の間に実施した組織Cへの聞き取り調査, A高校
修学旅行の同行調査などに基づくものであり, 組織
CおよびA高校の関係者の方々に, 多大なるご協力
を頂いた. これらの方に記して, 深く感謝する.